

第9回全国路面電車サミット 2008 福井大会について

全国路面電車サミット 2008 福井大会実行委員会事務局
NPO 法人ふくい路面電車とまちづくりの会 (ROBA)

○はじめに

去る2008年10月17日、18日、19日の3日間にわたって開催された第9回全国路面電車サミット2008福井大会について報告したい。

まず、全国路面電車サミットとは、全国の路面電車が走る都市で活動する路面電車愛好支援団体でつくる全国路面電車愛好支援団体協議会と、路面電車事業者でつくる全国路面軌道連絡協議会が中心となり、路面電車を活かしたまちづくりについての意見交換を目的に1993年から開催している全国会議である。その第一回の開催は札幌市で、路面電車の存廃問題をきっかけに、札幌市の呼びかけで開催された。以降、おおむね2年に一度の割合で、広島市、岡山市、豊橋市、熊本市、函館市、高知市、長崎市と、8都市のリレーで開催されてきた。そして第9回が2008年の福井市であった。

地域において、環境や高齢社会への配慮が必要となる新しい時代の地域づくり、およびそれに密接に関係するLRTの整備や、鉄軌道の再生・活性化、既存の鉄道施設を活かしたLRTシステム

の構築を行うにあたっては、住民の深い理解と住民参加が必要であることから、徹底した広範な情報提供を行うことで住民の意識を醸成することが求められている。

また、全国的にもLRTの整備、鉄軌道の再生・活性化や既存の鉄道のLRT化等の整備を進めるにあたっては、国の法制度や補助制度等の支援制度の充実、国と地域の連携が必要不可欠である。そのため、全国路面電車サミットを開催し、路面電車や地域鉄道の整備・活用に関する機運の盛り上げを図るべく地域住民に対して情報提供するとともに、全国に向けてアピールをしてきた経緯がある。

それぞれのサミットでは、各都市の現状と課題を議論の下地として、路面電車をはじめとする公共交通全体を視野においた、未来にわたるまちづくりというテーマで話し合われてきたが、福井でもやはり、全国路面電車サミットの開催が求められるような、解決すべき課題が存在していた。

○鉄道からLRTへ

福井県は世帯あたりマイカー普及率が1.751台で全国1位、郊外型大型店の販売額の割合も全国1位という典型的なクルマ社会である。

また、2000年、2001年の京福電鉄の二度の重大事故によって、福井では京福電車の沿線が一夜にして鉄道のない地域になる事態を経験し、行政、住民を含め、地域が鉄道の存廃について徹底した

議論を行った。その結果、地域は鉄道の存続・再生の道を選び、鉄道は住民が参加するジョイントセクター、えちぜん鉄道に生まれ変わった。沿線住民はえちぜん鉄道に対し、「乗って支える」活動を実践し、行政とえちぜん鉄道は「乗るしくみづくり」を展開して、ともに利用者の増加に務めた。特に、えちぜん鉄道が進めた乗客の視点に立っ

たサービスの向上は、乗客からの、さらには全国からの高い評価を得て、着実に乗客が増え、視察も増えた。これらの経緯によって、ついに、福井における鉄道の再評価がなされた。

一方、福井市はつい最近まで土地区画整理事業による、市街地拡大・郊外化政策を推進していた。そのまま行けば財政破綻は目に見えていた。そこで、坂川優前市長（故人）の市政になり、政策転換を行った。コンパクトシティを掲げ、核となる中心市街地の再生と、軸となる公共交通の再構築を行う方針が打ち出された。福井では当時、北陸新幹線の福井駅部の工事が計画されていたが、北陸新幹線の福井到達により、えちぜん鉄道の運行に支障が生じることが判明した。と、いうのは、えちぜん鉄道の福井―福井口間は北陸新幹線に走行空間を譲り、並行在来線となる北陸本線の複線のうちの片方をえちぜん鉄道が使用する。それにより、えちぜん鉄道は現行の勝山永平寺線1時間に2往復、三国芦原線1時間に2往復から、両線合わせて1時間に3往復に減便を余儀なくされる。切替工事期間には3年～4年間の運休も余儀なくされる。これでは、順調に乗客を増やしているえちぜん鉄道の経営に決定的な打撃を与えるのは明白である。また、同時に、これによって北陸新幹線のルートも、想定されていたものから大きく逸れ、住宅街を分断することが判明した。福井市は、これらの問題の解決を迫られることになった。検討の結果、既存のストックである鉄軌道の施設を

活かし、三国芦原線を田原町から福井鉄道福武線の路面軌道を経由して福井駅に至るLRTとして再構築することで、解決を図る方向性が確認された。えちぜん鉄道も状況を理解し、自ら三国芦原線のLRT化を選択した。

ちょうどそこへ、全国路面電車サミット長崎大会の実行委員会から、NPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会（ROBA）に対して、次回サミットの福井開催の打診がなされた。検討するための時間がほとんどない。急遽、福井鉄道と福井市に打診し、それぞれの了解を得て、福井で受け入れることを決めた。そしてその後、LRTの整備推進の目的で2008年に開催する方針が固まった。

当時の坂川市長は、実は、県議会議員時代に、ROBAの会（当時、法人認証前）のメンバーとして、2001年の全国路面電車サミット熊本大会に参加している。そして、そこで「今、京福電鉄が廃止の危機にさらされている。私たちはこれを次の世代のためにどうしても残したい。皆さんの協力をお願いしたい。」という演説している。ROBAの会では、坂川氏も含め、その時すでに京福電鉄と福井鉄道という既存のストックを活かしたLRTの構築を視野に、京福電鉄存続のための活動を行っていた。坂川氏は、ROBAの会と連携し、情報提供や枠組みの提案に取り組むなかで京福電鉄の存続の立役者の一人となった。（写真1）



写真1 福井鉄道福武線の路面軌道とえちぜん鉄道三国芦原線が接続する田原町駅。福井のLRT計画では、この田原町駅で両方の線路をつなぐ。

○全国路面電車サミット 2008 福井大会について

福井で開催する全国路面電車サミットは、坂川市長にとって、今度は開催市の市長として、かつて存廃問題に揺れていた京福電鉄のLRT化を報告する場となるはずの、思い入れのある大会であった。ところが、坂川市長は就任直後に健康を害し、入退院を繰り返した後、在任期間1期の半ばで退任し、その後死去された。政策の基本的な方向性は現在の東村新一市長に引き継がれ、三国芦原線と福武線の直通運転によるLRT化も検討が進められている。東村市長は県職員時代、えちぜん鉄道の制度設計に携わった経緯があり、さらに、現在、市内全体の公共交通の再評価・再構築の政策を進めている。減損会計の導入に端を発した福井鉄道福武線の存廃問題も、紆余曲折はあったものの、沿線自治体と住民が合意形成に取り組み、存続・再生という結論が出された。その過程で、福井鉄道を、2007年につくられた「地域公共交通の活性化及び再生に関する法律」に沿い、2008年にできたばかりの「鉄道事業再構築事業」を適用して再生させることが決められた。これも、全国路面電車サミットの福井での開催がタイムリーな取り組みであるとして関係者から受け入れられる要因となった。これらの背景と経緯があり、福井で全国路面電車サミットが開催されることとなった。

さて、福井での開催が決まった路面電車サミットであるが、福井の路面電車はこれまで路面電車サミットが開催されてきた8都市のものとは比べて明らかに異質である。福井の路面電車は他の都市とは違い、市街地内に限って輸送を担う路面電車ではない。つまり、郊外鉄道の福井鉄道福武線が都心部に路面軌道で乗り入れる形態を採り、全長21.4キロメートルのうち、路面軌道区間は3.3キロメートルに過ぎない。そして、さらに現在計画している三国芦原線との直通LRT化によって鉄道線20キロメートル余りの運行が加わる。全体のなかの路面軌道の割合はますます小さくなる。そのことから、ROBAのメンバーの間に、福井大会においては、路面電車だけでなく地域鉄道を

LRTの素材としてとらえることで、路面電車サミットで堂々と取り上げたい、そして、はっきりと「LRT」をテーマにしたい、との思いがあった。

実施体制づくりでは、2007年10月に第9回全国路面電車サミット福井大会準備委員会をまず立ち上げた。ここでは、福井県と福井市に参加して頂き、今後、どのような実行委員会を組織していくのか、どのような団体に実行委員会への参加を求めるのか、行政の関与のあり方、助成申請の方向性、実行委員会の性格を“代表者委員会”とするのか“作業委員会”とするのか、などが話し合われた。その過程で、実行委員会に、福井鉄道に加え、えちぜん鉄道にも参加を求めることを確認した。準備委員会は11月にも開催され、12月からは実行委員会に移行した。実行委員会は、最終的に福井鉄道、えちぜん鉄道、全国路面軌道連絡協議会、環境NPO、学識経験者、ROBAからメンバーが集まった。福井県と福井市はオブザーバーとなった。実行委員長はROBAの内田桂嗣会長が就き、故坂川優前福井市長を名誉委員長に頂いた。主催は全国路面電車サミット2008福井大会実行委員会。共催は全国路面電車愛好支援団体協議会、全国路面軌道連絡協議会、福井鉄道、えちぜん鉄道、NPO法人エコプランふくい、NPO法人ふくい路面電車とまちづくりの会(ROBA)。後援は国土交通省、福井県、福井鉄道とえちぜん鉄道の沿線7市町、福井経済同友会、福井商工会議所、地元の新聞社、テレビ局、ラジオ局、大学系研究所、福井鉄道沿線3市それぞれで住民がつくる福武線サポート団体協議会、まちづくり福井、福井観光コンベンション協会、福井市環境パートナーシップ会議などから頂いた。特徴的なのは、福井鉄道とえちぜん鉄道の沿線7市町、福井鉄道のサポート団体の後援だろう。他の都市で路面電車サミットを行う場合、沿線自治体の後援は一つの市になることが多い、福井の例は、対象となっている路線が市内軌道だけではなく多くの割合の郊外鉄道を含んでいることの表れであ

る。また、サポート団体が名前を連ねているのは、福井鉄道の存続運動のさなか、乗って支える取り組みが関わっていることの表れでもある。そして、これらを巻き込んでいるのは実行委員会の明確な意思である。

実行委員会の会合はサミット開催までに14回開かれ、さらに週1回の割合で、事務局会議を、実行委員会事務局を置いたメンバーの事務所で実施した。この事務局会議はROBAのコアメンバーで構成され、実行委員会のワーキング部会の役割を担ったが、毎回、19時から始め、日付が変わっても続くことも多かった。そして、事務局会議の構成メンバーはさまざまな仕事を分担し、仕事を持ち帰って日々作業を進めた。福井大会は、他の都市におけるいくつかの路面電車サミットのような、行政の開催する大きなイベントとの併催はなく、予算規模が小さかったので、外部の力を借りず、何事も自分の手による作業でまかなう、手作りサミットとなった。また、小さな予算ながらも充実した路面電車サミットを実現するために、さまざまな工夫を行った。その筆頭が報告書の作成を止め、講演の様子と資料のデータをDVDに記録して発行する方法を選択したことであろう。報告書の作成は通常、額が大きく、経費全体のなかでも大きな割合を占める。そのためDVD記録方式にしたのである。これで予算を大幅に切り詰めることができたと同時に、テープ起こしのような作業も不要になったことから、路面電車サミット終了からあまり日を置かずに発行できることにもつながった。

路面電車サミットの企画は、実行委員会に参加した各団体が持ち寄り、それぞれの部分をその企画を持ち寄った団体が主催する形も採り入れたが、それによって、それぞれの団体の渾身の企画が揃い、そのことによって、結果として、複数の目玉企画を持つ路面電車サミットを実現することができた。

福井大会のテーマとして、実行委員会では「ひと・まち・環境をつなぐLRT」を選んだ。企画内容としては、「路面電車と郊外鉄道を取り込み、両者を融合したLRT整備の推進」ということを軸に、

「地域が一体となって支えるえちぜん鉄道の躍進」「地域公共交通の活性化及び再生に関する法律の施行」「福井鉄道の再生」「LRTに関する新技術の福井からの発信」などの小テーマを念頭に置いて企画した。そして何より、「福井県内住民への公共交通に関する啓発」に主眼を置いた。その結果、福井大会の企画は表1の通りとなった。(表1)

講演を依頼した段階で、実は国土交通省の2つの局にそれぞれ1題ずつの講演をお願いしたが、「この演題も必要だろう」との申し出を頂き、一時は4題になった。その後の調整で3題にまとめられたが、国土交通省には非常に力を入れて頂き、福井大会の企画が充実する要因の一つになった。厚く感謝申し上げる次第である。福井では、当時は福井鉄道の総合連携計画が議論されている段階で、鉄道局財務課長の瓦林康人氏の講演のなかで説明された「地域における公共交通の活性化及び再生に関する法律」は、たいへん重要な局面での講演となった。この講演を目指して参加される方も多かった。また、えちぜん鉄道三国芦原線と福井鉄道福武線の直通LRT化が福井市都市交通戦略協議会で議論されており、都市・地域整備局都市計画課都市計画調査室長の阪井清志氏に講演して頂いた内容は、福井からの情報発信という意味をも多分に含んでいて重要な位置づけを持っていた。鉄道局技術企画課技術開発室長の潮崎俊也氏の講演の内容も、福井から情報発信するバッテリートラムの取り組みとリンクしており、やはり重要な位置づけを持っていた。(写真2)



写真2

表1 第9回全国路面電車サミット2008 福井大会プログラム

<p>1日目 10月17日(金) 会場:AOSSA 県民ホール</p> <p>開会の挨拶 福井大会実行委員長 内田桂嗣</p> <p>公共交通とまちづくりセミナー</p> <p>『地方の鉄道・軌道が直面する課題と国の活性化支援策について・ 鉄軌道に関する技術開発について(LRT関係)』</p> <p>国土交通省鉄道局 財務課長 瓦林康人氏 技術企画課技術開発室長 潮崎俊也氏</p> <p>『都市におけるLRTの整備推進及びトラムレインの導入について』</p> <p>国土交通省 都市・地域整備局 都市計画課都市計画調査室長 阪井清志氏</p> <p>財団法人地域環境研究所 主催</p> <p>『福井のまちづくりと交通』</p> <p>名古屋産業大学教授・(財)地域環境研究所理事 加藤哲男氏</p>	<p>3日目 10月19日(日) 午前 会場:AOSSA</p> <p>第一会場 AOSSA 県民ホール</p> <p>公共交通を考えるシンポジウム</p> <p>地域公共政策学会 主催</p> <p>基調講演『えちぜん鉄道の5年間を振り返って(地域共生と経営改革 による地方鉄道の再生の道)』 えちぜん鉄道代表取締役社長 見奈美 徹 氏</p> <p>パネルディスカッション 『地域公共交通とガバナンス』 (パネリスト)</p> <p>名古屋大学大学院環境学研究科准教授 加藤博和 氏 福井市都市戦略部理事 脇本幹雄 氏 まちづくり福井(株)代表取締役社長 宮川雅敏 氏</p> <p>(コーディネーター)</p> <p>福井県立大学経済学部准教授 浅沼美忠 氏</p>
<p>2日目 10月18日(土) 午前 会場:福井鉄道西武生駅構内</p> <p>福井大学バッテリートラム実験の公開</p> <p>パネル展示・バッテリー説明・走行実験の公開</p> <p>福鉄西武生駅構内において、国内3例の内のひとつである福井大学 荻原研究室によるバッテリートラムの実験を公開します</p> <p>午後 会場:織協ビル8階ホール</p>	<p>第二会場 AOSSA 706・707号室</p> <p>全国路面電車愛好支援団体協議会代表者会議</p> <p>「サミット宣言検討」/「新規会員加入・脱会の件」/ 「規約改正、次回開催の件」</p> <p>全国路面電車サミット会議</p> <p>「全国路面電車愛好支援団体協議会の意見交換会」</p> <p>午後 会場:AOSSA県民ホール</p>
<p>講演会 路面電車・LRTの最新事情</p> <p>『福武線存続までの道のり』 福井鉄道常務取締役鉄道部長 今枝孝司氏</p> <p>『福武線についての意識調査アンケート報告』 社団法人武生青年会議 所 次代につなぐまち協創委員会委員長 坪谷 崇氏</p> <p>『地域共生型サービス企業をめざして』</p> <p>えちぜん鉄道取締役設計画部長 島 洋 氏</p> <p>『世界のLRT』-映像による紹介- 都市交通研究家 服部重敬氏</p> <p>『日本の路面電車の最新事情』</p> <p>全国路面軌道連絡協議会 常務理事 藤元秀樹氏</p> <p>『LRVの導入に向けて』 豊橋鉄道 取締役鉄道部長 田中敏和氏</p> <p>『LRT整備推進都市からの報告』 堺市建築都市局 鉄軌道推進室 室次長兼鉄軌道企画担当課長 田村啓一郎氏</p> <p>路面電車ミニツアー</p> <p>福鉄電車乗車(市役所前→田原町→市役所前→福井新→木田四ツ辻)</p> <p>歓迎レセプション(会場:商工会議所8階レストラン プローニュ)</p>	<p>世界に響け! 福井産楽器の共演</p> <p>ハーブとマリンバのミニライブ/「ふるさと電車に乗って」合唱ほか</p> <p>LRTフォーラム</p> <p>福井市の交通政策 福井市都市戦略部副理事 脇本幹雄氏</p> <p>富山市の交通政策 富山市都市整備部交通政策課長 高森長仁氏</p> <p>市長会談 『まちづくりにおける都市交通政策を考える』</p> <p>福井市長 東村新一氏・富山市長 森 雅志氏 聞き手 福井大学大学院教授 川上洋司氏</p> <p>サミット宣言 ふくい路面電車とまちづくりの会理事 岸本雅行</p> <p>閉会の挨拶 福井大会実行委員(ROBA副会長) 畑 みゆき</p>
<p>3日間の関連イベント・乗車イベント</p> <p>全国の愛好支援団体のブース</p> <p>パネル展・写真展</p> <p>日本各地の事例・世界各国のLRT それぞれの魅力を画像で紹介。</p>	<p>記念フリー切符発売</p> <p>福井鉄道 サミット記念/えちぜん鉄道 開業5周年記念 カーフリーデー・ハチドリ計画2008(抽選会)</p> <p>カーフリーデー(パネル展示)</p> <p>カーフリーデー環境ツアー(えちぜん鉄道のサイクルトレインで三国へ)</p>

福井大学工学部の荻原隆教授は、路面電車サミットの趣旨に賛同くださり、実験の日程を福井大会に合わせて頂くことができた。これも今大会に大きなインパクトを添えた。

服部重敬氏の映像による講演と、同時開催のお仲間との写真展は、視覚に訴えたことで、LRTに対する、住民の大きな関心を集めた。(写真3)



写真3

新規にLRTによる東西軌道を整備し、既存の路面電車も取り込んで都市の活性化を図ることを決定した堺市の、鉄軌道推進室の室次長、田村啓一郎氏の講演は、全国においてLRT整備を検討している自治体や関係者にとって、大きな刺激になったはずである。

えちぜん鉄道の見奈美徹社長は、開業5周年記念のイベントの合間をぬって時間調整をして講演して頂けた。これによって地方における鉄道経営モデルの変革を強烈に印象付けたのではないだろうか。

富山市の森雅志市長と福井市の東村新一市長の会談はいろいろな方々とのつながりによって実現できた。特に森市長は、多忙なスケジュールのなか、「これは出演するべき催しである」と判断して頂き、かなり無理な調整をして出演して下さったことに感謝申し上げたい。日本で最初のLRTを誕生させた画期的な取り組みにかかわる生々しい話は、参加者を惹きつけた。各地での取り組みにとって参考になる話が多かったのではないだろうか。東村市長からも、えちぜん鉄道がどのようなことが要因となって発足できたのか、

及び、そこから福井市がLRT整備に取り組むことになるまでの経緯をお話し頂いたことは、福井大会においてきわめて重要だった。特に、都市政策において同じ方向性を持ち、ともにLRT整備を推進する北陸の2つの都市の市長が、富山ライトレールとえちぜん鉄道という日本におけるリーディングプロジェクトを生み出し、さらに次の施策を推進していく過程での会談はたいへん貴重なものであった。そして企画段階からさまざまな助言を頂き、会談で重厚なコーディネートをして下さった福井大学の川上洋司教授もまた、このサミットにとって大きな存在だった。何より、すべての講演が体系的に配置され、福井大会としての「一体の情報」を構成し、発信されたことは重要であった。あらためてご講演頂いた講師の方々に感謝申し上げる次第である。

準備段階で壁にも突き当たった。これまで何度もシンポジウムなどのイベントを開催した経験から、大会当日の宿泊の心配はしていなかった。ところが県外の方から「ホテルの予約が取れない」という連絡が早い段階であった。調べてみると、大会の日程と重なるように、県内で人気歌手のコンサートが2日連続してあり、県内の宿泊施設が大方予約済みとなっていた。そのため、片っ端からホテルに問い合わせの連絡を入れ、いくつもの旅行会社と交渉し、観光コンベンション協会にも協力を依頼した。その結果、いくつかのホテルが部屋を確保してくれたと同時に、一つの旅行会社が他のイベントで押さえていた部屋を路面電車サミット用に切り替えてくれた。これらの状況が整うまで1ヶ月以上を要した。

また、次回開催地がなかなか決まらなかった。自ら手を挙げる都市はすでにない。あそこなら、と打診してもタイミングが合わない。一時は「次期開催地を決めずに大会に臨むしかない」との話が出ていた。しかし、いろいろな人とのつながりで話をしていくうち、日頃から共同研究をしている富山の複数の団体の仲間が動いてくれ、富山開催を阻んでいた障害を取り除き、富山市で次回の路面電車サミットを開催する合意を取り付けてくれた。

さらに、会場設営や当日の会場運営に人手が足りない。そこを、福井大学の川上教授と川本義海准教授がそれぞれの研究室に所属する学生をスタッフとして派遣してくださった。会場設営も会場運営も、これで問題を解決できた。

そのほかにも、多くの方の協力を頂いた。ハーブ演奏、マリimba演奏、合唱についても、出演者の方々にいろいろな形で協力を頂いた。とにかく、何から何まで、いろいろな人とのつながりに助けられ、いろいろな人の力を借りることによって、福井大会を開催することができた。これには心から感謝するばかりである。

福井大会では、2つの環境NPOと協力し、カーフリーデーの取り組みの一環として全国路面電車サミットを位置づけた。そして環境への取り組みにおけるLRTの位置づけやクルマの利用抑制、持続可能なまちづくりについての情報発信を多く

の人たちに対して行うこととなった。これは、この路面電車サミットが次の展開につながる要素である。

福井大会の直前は時間の流れが速い。みな、睡眠不足の状態で当日を迎えた。多くの方々が来場してくれた。行政の方、福井鉄道のサポート団体協議会の方々、住民の皆さん、商店街の方。そして高校生も、車内吊り広告を見て参加してくれた。それぞれの講演を多くの参加者が熱心に聞いていた。実行委員会が参加者に届けたいと思ったメッセージは十分に伝わったのではないだろうか。そして全国にアピールできたのではないだろうか。懇親会も狭い会場に定員一杯の参加者があり、大いに盛り上がった。

全国路面電車サミット2008福井大会は最後にサミット宣言を採択して幕を下ろした。以下はその宣言の内容である。(写真4、5)



写真4



写真5

○サミット宣言

サミット宣言：私たち全国の路面電車愛好支援団体と軌道事業者ならびに人と環境にやさしいまちづくりについて深い関心を持つ市民は、全国トップクラスの自家用車保有率でありながら、地域一体となって地方鉄道を再生させた福井市につどい、路面電車を活用したまちづくりの新しい制

度や手法、それぞれの地域における取組みについての情報交換をとおして、それぞれの地域において路面電車が担う新たな役割を明確にし、LRT（ライトレールトランジット）へ進化させることが重要であるとの認識を深めた。私たちは、LRTへの進化によってまちづくりと連携した機能性の

向上、および路面電車と鉄道・バス・自転車との連携強化による利便性の向上をはかることにより、自動車に頼らなくても暮らしやすいまちの実現を目指し、ここに次のことを宣言する。

一、路面電車が地域公共交通ネットワークの基幹としての役割をはたせるよう、事業者は路面電車の機能と利便性の向上になお一層の自助努力をおこない、愛好支援団体は事業者や地域と連携してこの取組みを支援します。

一、路面電車が持つ良質な都市の社会基盤としての資質が活用されるよう、それぞれの地域にお

いてまちづくりと一体となった交通体系づくりを自治体に働きかけ、市民にもアピールをおこない、計画づくりに積極的に参画します。

一、路面電車が人にも環境にもやさしい地域のシンボルとして認知されるよう、路面電車により親しんでもらえるさまざまな取組みを行います。

一、路面電車を活用したまちづくりの取組み成果が全国各地で共有されるよう、活発な地域間交流をおこなうとともに、次の第10回全国路面電車サミットを富山市で開催します。

○おわりに

全国路面電車サミット2008福井大会の入場者数は、17日の入場者数が約200人、18日午前中のバッテリートラム実験公開が約120人、午後の会場の入場者数が約280人、19日のサミット会議の参加者が約50人、県民ホールの入場者数が約200人、延入場者数約850人であった。

サミット終了後、参加された方々から福井大会を評価する言葉を頂いた。例えば、「中味の濃いすばらしいサミットでした。えち鉄復活、堺市のLRT計画、富山森市長と福井東村市長の会談での『メ』は川上先生のすばらしいコーディネーターとともに、今までのサミットにない感動のプログラムでした。」「よくここまで意欲的なお話を取り揃え皆さんを刺激したのは一大成果だと思います。」など、他にもいろいろな言葉を頂いた。“中味の濃い”“意欲的なお話を取り揃え”というのは、実は時代を映した言葉であり、国や各地域が真剣に取り組んできたことがここへきて花開こうとしているからに他ならない。

それから、驚いたことに路面電車サミットは予想以上にマスコミの報道で大きく取り上げられた。路面電車サミットの様子は連日報道され、詳細な情報が紙面を賑わわせた。最終日がえちぜん鉄道の開業5周年と重なったという点もあるが、それでも、マスコミを含め、地域全体が着実に公

共交通に対する意識を高めてきていることを実感した。この地は不幸にも京福電鉄の二度の重大事故により、一度電車が止まり、2年以上にわたり電車のない状態を経験した。そのときから、自治体と住民が協働し、さまざまな取組みを通して勉強し、議論し、鉄道の再評価をしてきた。そのことから、福井鉄道の存廃問題でも住民が自ら積極的に合意形成に参加し、自治体と協働し、鉄道を再生し、地域社会をよりよいものとするための議論を行った。福井には鉄道を含め、公共交通に関心を持つ人が着実に増えている。富山市で取り組まれているLRTによるまちづくりについても、関心を持って見ている人が予想外に多い。この状況を見ると、この地域に公共交通の「しくみ」を作り、「きっかけ」を提供することで、公共交通が活性化、再生することを予感することができる。第9回全国路面電車サミット福井大会は、まさにそのような局面で開催され、地域のLRT議論の集大成として機能できたのかもしれない。また、そうであることを願わずにはおれない。私たちは、機を逃すことなく、さらなる啓発活動や、地域が公共交通を活かしてまちづくりを行うための“空気づくり”を今また、行っていきたいと考えている。